
ぶらり異世界の旅

まりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶらり異世界の旅

【Nコード】

N82400

【作者名】

まりん

【あらすじ】

登場人物

・黒河裕紀くろかわひろき

高校二年生

人見知りが激しく口下手

ミリタリーオタク、変態、ロリコンということ以外は普通の人間

・加藤将生かとうまさき

高校三年

気さくで人懐っこい

刀剣オタク、変態、ドSということ以外はごく普通の男

・あんじょうしお
安生六緒

高校一年

面倒見がいい仕切り屋

変態、ドMということ以外はごく一般的な高校生
やせてるのにマヨラー

日常（前書き）

平凡な人生こそ真の人生だ。
のみ真実があるからだ。
フェーデラー

虚飾や特異から遠く離れたことに

日常

麗らかな朝日が降り注ぎ小鳥が小さく囀るのどかな朝に俺、黒河裕^{クロカワヒ}紀は目覚める。

暫くばーっとするが、朝食をとる準備をする。

ふと時計部屋の時計が目に入り、あることに気づく。

「あ…」

思わず声をあげてしまったことで顔を赤らめる恥ずかしがり屋な俺は、いくら急いでいようが朝は食べないと頭が回らないから引き続き朝食をとる。

そう、俺は遅刻をしている。

うつかりしていた。10分前集合は当たり前なのに

8時50分に学校に集合しなくてはならないが、今は7時55分だ。

ちなみに学校までは1時間かかる。

だが、俺は遅刻しようがペースは崩さない。

いつものようにスローペースで支度をして家を出る。

ボーっと何も考えずに無心になり、気がつくと学校についている。

これは俺の得意なことだ。

先生には悟りの境地とまで言われている。

余談だが、悟りには小五口りという文字で出来ている。

この単語を考えた奴はさぞかし立派な紳士だったに違いない。

そんなことを考えていたらいつの間にか教室の前だ。

「おい黒河！遅刻だぞ。」

白い髭をたくわえた老教師が教科書を持ったまま静かにキレる。

「すみませんでした」

俺はすかさず鼻の掃除をしながら誠意を込めて謝る。

「なんだその態度は！ちよつと来い！」

どうやら俺の誠意は伝わらなかったようだ

俺は先生に引きずられて教室を後にした。

はあ、ひどい目にあつた。

俺はあの後、長い長い説教を聞かされる羽目になった。

ちなみに話自体は全く聴いてない。ただ正座がキツかったただけだった。

そして今の時刻は昼休みに差し掛かっている。

今日は全然ツイてない

そう思いながら俺は自販機でジュースを買う。

ジュースを持って教室がある4階まで行くための階段をゆっくりのぼると後ろから不穏な気配がする。

「モンゴリアンチョップ!!」

振り返る前に俺の背中に衝撃が走ると同時に変なことを叫ぶ声が聞こえた。

「プフォー!!」

俺のバカみたいな声が響く中、後ろにいる奴は俺に話しかけてくる。

「裕紀、お前早く貸してる漫画返せよな」

この呑気な声を出しているのは俺より一歳年上の加藤将生だ。カトウ マサキ

ツンツンした髪の毛いつも笑ったような顔が特徴で、いつも優しくうに見えるが中身は超マイペースな

ドSという外見詐欺ともいえる人物なのだ。

「あ、ごめん忘れてた」

「案の定か？この社会不適合者が」

「人聞きの悪いこと言うな」

「ロリコンの時点ですでに不適合者だろうが」

「ロリコンで何が悪い！俺は幼女を守る紳士なんだぞ！」

こんな会話で白熱していると上の階から一年の安生^{アンジョウ}穴緒^{ウシシオ}が降りてきた。

穴緒は俺たち三人のなかで一番年下で料理が得意だがたまに変なものを作る変わり者だ。俺たちはシオと呼んでいる

ちなみにDMだ

「俺、参上！雑談なら後でしょうぜ。ここじゃ邪魔だからな」

「ああ、すまん」

「悪い悪い」

俺たちは素直に謝り、三人で階段を上りながら話すことにした。

「じゃあな変態共」

ちよつと雑談した後、将生はニヤつきながら言い放つ。

「お前もだろうがこのドS野郎が」

「知ってるか？Hとエロつて別々に見るといやらしい言葉だが二つ合わせるとHEROになるんだぜ！！」

俺は憤慨するがシオは笑いながら開き直る。

こういうところで人間の器の大きさが分かるのだろうか…

やつと今日の授業は終わった

俺は同じクラスに友達が一人もいないので退屈な上になんとなくいたたまれないのだ。

なので学校が終わるとホッとするのである。

最近はなんとなくみんなが俺を無視しているように感じるのは気のせいであることを祈りたい

そんなことを考えているといつの間にか自転車置き場だ

いつもはこのあと家に帰って俺の一日は終了するが今回はそうはいかないようだ。

「お前の罪は何だ？」

背後から響いてくる低い声に思わず背筋が伸びてしまう。

振り返ると俺の真後ろに190cmはあるつかと思われる巨体の男が俺を見下ろしていた。

日常（後書き）

あなたは弱さから逃げることはできない。時には最後まで戦わなければならぬし、死んでしまうこともある。戦うなら、何故今でないのか、あなたは何処にいるのか？
ロバート・ルイス・スティーヴンソン

失踪（前書き）

運命のなかに偶然はない。
がそれを作っているのだ。
ウィルソン

人間はある運命に出会う以前に、自分

失踪

「お前の罪を言ってみろ」

後ろにいる白い服を着た熊みたいなやつが俺に問いかけてくる。

俺は震え上がり、頭が回らなくなる。

俺の罪？

俺、何かやったか？

いやまで、見に覚えがあるかもしれない

たとえばこの前、自転車に乗ってたときボーっとして信号無視したときとか

たかがそのくらいでここまで追いかけてくるとはどつにかしてる。

しかも奴は俺の背丈（160cm）よりもでかい斧を肩に背負っていた。

「お前の罪は何だ」

斧に手をかけながら奴は先ほどと同じ質問を繰り返す。

俺は戦慄した。

あれをどう使うのか…考えたくもなかった

「お前の罪…それはお前がそこに存在することだ」

白熊は肩に背負った斧を両手に持ち替え振りかぶる。

存在全否定！？

「な…なんで俺を狙うんですか」

こんなときでも臆病な俺は怖そうなやつには敬語を使ってしまう

嗚呼なさない…

「すべては神の意思…お前は反逆者だ」

意味が分からない。怪しい宗教か？

そして奴は処刑人のごとく俺の頭に向けて斧を振り下ろす。

もうだめだ

俺は目を瞑り、訪れるであろう死の瞬間を待った

「君、何をしているのかね？」

「殴るならこいつじゃなくて俺を殴れよ。ただし素手でよろしく」

「ぐっ」

どうやら助かったようだ

目を開けると奴は縄で亀甲縛りされていた・・・キモい

「大丈夫か裕紀」

一瞬でそんな芸当ができるやつを俺は一人しか知らない

俺の前には死ではなく鞭とラジオペンチを持った将生と宍緒が仁王立ちしていた。

「てめえの敗因はたった一つだけ。たったひとつのシンプルな理由だ…てめえは俺を怒らせた」

すぐさまジョジョ立ちしながら例の台詞を言う将生

「裕紀、お前は俺たちに構わず逃げろ」

「すぐ追いつくからよ」

おい…それ死亡フラグ…

そう思ったが空気の読める俺（自称）

無言でうなずき自転車に飛び乗る。

さよなら、将生、宍緒。

来世でまた会おうぜ

そう思っていたところ後ろで将生が喋る声が聞こえた

「さて…俺の友達殺人未遂の容疑で…これからお前を拷問する」

断末魔の悲鳴と将生の笑い声が聞こえた時点で俺は考えるのを辞めた
学校から出ると歩道に車が待ち構えていた

中にはさっきの奴と同じ服を着た奴がいた。

やばい！

俺はとっさに急ブレーキをかけて自転車と一緒に地面に倒れた。

その瞬間、俺の目の前で車が爆走して、学校の隣にある民家の家の
前で急ブレーキをかけて止まった。

俺がブレーキを踏まなければ今頃俺は道路で血まみれになって倒れ
ていたに違いない。

何とか難を逃れた俺はそのまま全速力で家まで走った

追ってくる者は…たぶんいなかった。

「追わなくてよろしいのですか？」

車内でスーツを着た男が運転手に話しかける

運転手はその問いに笑顔で答える。

「ええ、現時点であの方は黒河裕樹を殺す意思をもっていないことが分かったので今日のところは引き上げます。あなたの仕事は一日延びることになります」

スーツの男は笑顔で質問する。

「何故明日なのですか？」

「わかりませんか？」

笑顔を絶やさずに運転手は続ける。

「あの方が目覚めるのは今夜です。この世界は明日で終わりですよ」

必死に自転車で家路に付いた後、俺はまずあのまま置いてきてしまった将生と宍緒の無事を確認した。

まず将生だが、電話すると3コール後ようやく電話に出た。

「もしもし……」

「あ、裕紀だけとお前大丈夫か？」

「電話に出てる時点で分かるだろうが……俺もシオも怪我一つないぞ」

「よかった……あのマツチヨはどうなった？」

「あいつなら今頃、ホモが多いことで有名な柔道部の部室に全裸で縛り付けてあるぜ」

お、恐ろしい

こいつだけは絶対に敵に回してはいかん

「ど、どうやってあんなマツチヨつかまえたんだ？」

武器まで持っていたのに何の怪我もなくやすやすと捕まえられたことが俺は不思議に思った。

「よろしい、順を追って説明しよう。まず、俺たちは斧持ったマツチヨとお前が喋っていたところを見つけてシオはシャベルを、俺は縄をもつて後ろから見ていた。そしたらちょうど校舎から出てきた荒居が面白がつてガスバーナーとカメラを持ってきて、俺にガスバーナーを渡した後、カメラで撮影してたのさ。そして、ちょうどマツチヨが斧を振り上げたとき、俺とシオは後ろからこっそり近づき、シャベルで頭を殴って怯んだ隙に縄で奴を縛ったのさ。その後はガスバーナーで背中を……」

「わ、わかった。もういいやめろ」

想像するだけでおぞましい

「……しかし、なんであいつは俺を殺そうとしたんだろう」

「さあな。まあ神とか言ってたし、ただの基地外だろう。」

「まあそうだろうな」

殺される理由なんかどこにもない。

たぶんどっかの宗教団体が拉致する人間を探してて、そこに偶然俺がいたんだろうな。

俺はとりあえず将生とシオが無事だということが分かって心底ほっとした。

「とりあえず生きててよかったな」

「大げさだな。俺もシオもピンピンしてるという………の………」

急に将生の言葉が途切れた。

「おい、どうした？」

「ナンデモナイ。オヤスミ」

そういうと、将生は一方的に電話を切った

今の将生の様子は確実におかしい。

胸騒ぎがしたので俺はシオに電話をかけてみる。

「……………おかけになった電話はお呼びしましたがお出になりません」

俺は思わず電話をおとした。

失踪（後書き）

強い人間は自分の運命を嘆かない。
シヨーペンハウエル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8240o/>

ぶらり異世界の旅

2011年10月7日21時21分発行